

東京バッハ合唱団 月報

[第 731 号] 2023 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.731

May 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

イースター(復活祭)は、どんな祝い方? 遊び方?

大村 恵美子 (主宰者)

夢見から目覚めた今は 2023 年 4 月 8 日 (土) 朝 5 時。92 歳の私が、数年前からほとんど毎日のように、明け方近く、それぞれにとっても楽しい夢を見て、目覚めることになる——。

あしたは、イースター。

月報にもすでに何回かご披露して来ました。この世に誕生して来る赤ん坊の時は、まだ自覚できず、どんな気持ちか知ることが出来ないけれど、寿命が尽きて地球上の人間環境から去ることになる頃に、どんな夢を見ることになるのだろうか?

私の場合、おそろしい・悲しい・寂しい……とかのマイナス的なものは全くなく、どれも未知の人や既知の人もとりまぜて、面白い! と思うさなかに、目ざめることになるのです。そのことを、私はとても有難く思っています。

さて、前置きは早く終わらせて、さっき見た夢のこと。早くしないと、すぐに忘れてしまうので——。

イースターになると、よく子供たちは、大人が予めあちこちに隠しておく鶏のたまごを、探して歩くという風習があるようですね。私も子どもの頃、一度そういう環境に置かれて、たまご探しにみんなで興じたことがありました。その記憶の影響でしょうか、「東京湾に到達する陸地で、最も高いところはどこ?」という夢だったと思います。見晴しが良いはず。

小学校の時に大好きだった、担任の若いハンサムな男の先生の話は、これも何度かご披露したことがありますが、その先生の思い出がまだ生きていて、小佛峠を歩いて奥多摩の山々に遠足した過去から生じたのでしょうか、私たちの現住所 (世田谷区) から西にで



“千葉寫真館” 新作展 Spring 2023 (撮影: 千葉光雄・団員)

①花手水 (はなちょうず)、2023/03/23、稲城市

はなく、東に向かって、しかも山道のいちばん高いところから東京湾の岸辺に、降って行こうとしているのです。夢の中の不合理は、いつものこと。

そんなあたりに、人は住んでいるのかどうか?

と疑問に思っていると、そこに、小柄の老人夫婦が現れる。女性のほうは手拭いを「姉様被 (あねさまかぶり)」にして、二人とも「もんぺ」をはいた日本着姿で、にこにここと微笑みながら——。それが何とも言えずなごやかで、「ああ、年をとったらあんな表情で生きたいな!」と感じるほどの、素敵なカップル。

あ、ここで目がさめる。また夢を見たのだ。

今日の話はこれだけなのですが、赤ん坊・少年少女・若夫婦……、と人生の顔は変わってゆきますけれど、老人になっても、やっぱりお会いして楽しい人達はちゃんと存在するもの——。

朝の夢は、安心出来る、やっぱり嬉しい夢なのでした。

さて、日本でも、クリスマスにはどんなご馳走を、というのは知られて来たけれど、イースターには何を食卓に並べて、子供は何をして遊ぶのか、まだ私には常識程度に定着したものはないようですが、皆様はいかがでしょう。



②スイセン (水仙)、2023/03/20、さいたま市別所沼公園

月報 2023 年 5 月号 CONTENTS

- ・千葉寫真館・新作展 Spring 2023 ①~④ …p. 1, p. 3
- ・レクチャーコンサート“超入門”予告チラシ …p. 2
- ・2023-2024 シーズンの活動予定と曲目一覧 ……p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [27] (大野博人) p. 4

レクチャーコンサートとワークショップ 2023

“超入門” バッハの聴き方, 歌い方

(4声部合唱)

バッハは難しい?

「人類最高の音楽遺産」を、たのしく聴いて、やさしく歌ってみましょう

—— J. S. Bach 日本語演奏 ——

日時◆2023年5月20日(土) 開演:午後2時、終了:4時

会場◆荻窪教会(日本キリスト教団)

(〒167-0051 杉並区荻窪4丁目2-10、電話03-3398-2104、地図参照)

＜入場参加:無料、ただし予約制:先着50名＞ <後援・杉並区>

【曲目】

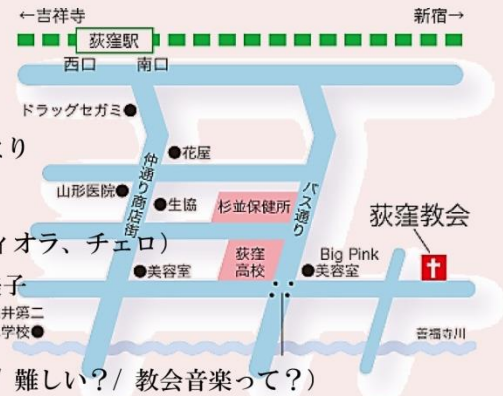
- カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》BWV 12より
- カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》BWV 22より
- 昇天祭オラトリオ(カンタータ第11番)《頌めよ 神のみ国》BWV 11より

【演奏】

- 室内楽:管弦楽団ARS有志のみなさん(オーボエ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)
- オルガン:田尻明葉 ○合唱:東京バッハ合唱団 ○指揮:大村恵美子

【内容】

- ①演奏とレクチャー「初めてバッハを聴く人に向けて」(バッハって誰? / 難しい? / 教会音楽って?)
- ②ワークショップ「簡単なバッハを、日本語で歌ってみる」(コラールは誰でも歌える)と演奏(みんなでもう一度)



【主催】東京バッハ合唱団

- ・東京バッハ合唱団は、J.S.バッハの合唱曲専門の演奏団体として国内の草分けです(1962年創立)。2011年、杉並区・荻窪の地(荻窪教会)に練習拠点を移してから、すでに10年以上、ご近所の皆さまのご理解のなかで活動をつけています。
- ・この5月6日に、第122回定期演奏会を開催しますが、会場がやや遠方(川口総合文化センター・リア音楽ホール)ですので、この企画は、その日のプログラムからの抜粋を、杉並区周辺の皆さまにお届けすることも兼ねます。
- ・バッハさん(右下のおじさん)、難しそうな顔をしています、実は毎週、子どもたちに“カンタータ”を歌わせてもいたのです。その“カンタータ”って何? なかに含まれる“コラール”って何?
- ・聴くだけでなく、子どもも歌ったという「人類の音楽遺産」の一端を、声を出して、かじって(ハモって)みませんか?

【入場参加ご予約(お問い合わせ)】

メール: office@bachchor-tokyo.jp 電話: 03-3290-5731 ホームページ: <http://bachchor-tokyo.jp/>

(ご予約の際に必須です: ①お名前、②人数、③住所、④メールアドレスまたは電話番号)



◆急遽、開催が決まりました。「月報」読者の皆さま、ご友人・知人お誘いあわせで、ぜひお気軽にご参加ください。予約が必要です。◆次回定期演奏会(第123回、来年2024年後半予定)では、20年ぶりに《マニフィカト 二長調》BWV 243を取りあげますが、ソプラノ2声部をふくむ合唱5声部編成のため、ソプラノを中心に合唱団員の増強が必須です。この企画は入団のキッカケ作りになれば、と敷居を低くして準備しました。◆OB/OGの参加、大歓迎。応援していただければ幸いです。ご一報ください。

2023 - 2024 シーズンの東京バッハ合唱団 活動予定と曲目一覧

<直近の活動予定>

2023 年

◆第 122 回定期演奏会

5月6日(土)、14:00 開演、リア音楽ホール(川口)

詳細は省略(当月報の届くころには終了のはず)

◆レクチャーコンサートとワークショップ 2023

「超入門」バッハの聴き方、歌い方 [左面、2 ページ参照]

5月20日(土)、14:00 開始、荻窪教会

BWV 12、BWV 22、BWV 11 (122 定演曲目) から合唱部分を抜粋。管弦楽:ARS有志メンバー、オルガン:田尻明葉、指揮:大村恵美子、コーラル指導:団員

◆夏の信州コンサートツアー

(コロナの状況が不安定のため中止)

◆クリスマス教会コンサート

12月2日(土)、14:00 開演、荻窪教会

12月9日(土)、14:00 開演、三崎町教会(水道橋)

《マニフィカト ニ長調》BWV 243 (部分、クリスマス用挿入曲付き)。恒例のシングイン形式で、聴衆とともに。管弦楽:ARS有志メンバー、オルガン:田尻明葉

2024 年

◆イースター教会コンサート

春に予定(調整中)、会場は荻窪教会と三崎町教会

松尾茂春・作詞/作曲《キラキラ星変奏曲》全曲

カンタータ《天は笑い 地はどよめく》BWV 31

◆夏の信州コンサートツアー (検討中)

◆第 123 回定期演奏会

日時/会場とも選定中(秋~年末)

カンタータ《おお とわの火よ おお 愛の源よ》BWV 34

カンタータ《主なる神 ダビデの子》BWV 23

《マニフィカト ニ長調》BWV 243 全曲

③ ハナカイドウ(花海棠)、2023/03/24、新宿御苑



<取りあげる曲目一覧>

●《マニフィカト ニ長調》BWV 243

来シーズン(2023-2024)は、バッハの合唱技法の粋を集めた名曲《マニフィカト》を20年ぶりにとり上げます。第123回定期(2024年秋~冬予定)は、カンタータ2曲と合わせて構成の計画。

合唱5声部(ソプラノ2部)の大きな合唱曲を複数擁する大曲ですので、この5月の公演終了後、ただちに音取りを開始、まる一年半かけてじっくり熟成させることとなります。

この曲の歌詞は、ルカ伝(1,47-55)の「わが魂、主を崇め……」に始まるいわゆる「マリアの讃歌」の全文。原文はラテン語。1行目 Magnificat anima mea Dominum……文頭(下線部=マニフィカト)は、「崇(あが)める」の意味です。教会では毎年7月2日の「マリアのエリザベト訪問の祝日」前後に読まれます(今年は日曜日)。ホームページから、上演用訳詞と原文をご覧いただけます(当ページ脚部参照)。

本年12月には、シングイン形式のクリスマスコンサートの中でも、先行して1,2曲、取り上げてみる予定です。この機会では、バッハ自身が用意した、クリスマス用の挿入曲が中心になるでしょうか(詳細策定中)。

●松尾茂春・作詞/作曲《キラキラ星変奏曲》

東京バッハ合唱団の古参団員(1977年入団)の作曲による、キリストの生涯をテーマとした歌絵巻。ご存じフランス民謡「キラキラ星」を定旋律とし、本家バッハの《ゴルトベルク》張りの技法を駆使して変奏させた壮大な大曲です(参考演奏時間70分)。昨年末のシングインの折に、全体の4分の1ほど(キリストの誕生前後)をご披露して大絶賛。来春の公演では、全曲の本邦初演です。

上記《マニフィカト》に匹敵する難度の楽曲が多出。これも1年をかけての取り組みになります。

●カンタータ《天は笑い 地はどよめく》BWV 31

復活節(イースター)用、22分、ソプラノ2部の5声部編成。

●カンタータ《おお とわの火よ おお 愛の源よ》BWV 34

聖霊降臨節(ペンテコステ)用、18分、冒頭は大合唱曲。

●カンタータ《主なる神 ダビデの子》BWV 23

復活節前第7日曜日(レント直前の週)用、19分。

以上3曲は、『バッハ・カンタータの場景』の連載で取り上げることになるでしょう。

④ 海棠の花弁の絨緞、同左



「懐かしい」のはなぜ？

安曇野閑人 大野 博人

エルサレムに駐在する後輩記者がおもしろいコラムを書いていた(3月21日付け朝日新聞・特派員メモ)。

イスラエル最大級のアニメ・漫画イベントを取材に行き、宮崎アニメが好きだという高校生に出会った。話を聞くと、「となりのトトロ」などを例に挙げて、「描かれる風景に懐かしさを感じるから」だという。

「なるほど、とメモを取っていたが、ちょっと待った。ここはイスラエル。オリーブの木が生え、南部は砂漠。日本と違う。『懐かしい』?」

不思議に感じた後輩に、高校生はこう説明したという。

「私の家族はもともと、旧ソ連からこの国に渡ってきたらしい。祖母が語る故郷の風景を、知らない。でも、宮崎アニメを見ていると、こんな感じだったんじゃないかなと思える」

「懐かしさ」ってなんだろう。私も安曇野を移住先に決めたのは、懐かしさのようなものに引かれたからでもあった。しかし、神戸生まれで、信州には縁もゆかりもない。内外のあちこちで暮したけれど、たいていは都会だった。雪が消えて木々が新緑をまといはじめ、菜の花や芝桜がいっせいに風景を彩る安曇野の風景の中に浸っていると、帰るべき場所に帰ったようにほっとするのはなぜだろう。

私たちは、懐かしいと感じるとき、実際は何を懐かしんでいるのだろうか。ずっと昔に暮していた場所を思い出すから? でも、行ったこともない場所を思い出すというのは変だ。では、幼いころ似た風景の場所に暮していたから? それも変だ。イスラエルの高校生は宮崎アニメの世界に似た場所で暮していたはずがない。幼いころの神戸について残っている私の記憶も、もっぱら住宅街や繁華街だ。安曇野の田園風景とはまったくちがう。

そんなことを最近考えるようになったきっかけがもう一つある。以前に小欄(2022年新年号、No. 715)でも紹介した本との出会いだ。クロード・ルブラン著『山田洋次が見てきた日本』。山田監督の評伝で、その人生と作品を丹念に描きながら、同時代の日本社会についても深く読み解いている。もちろんフランス人の読者向けに書かれているのだけれど、日本人にとっても、自分の暮す社会と時代をふり返る大きな手がかりとなる。

たとえば「寅さん」。このシリーズが続いている間、日本は経済大国へと離陸し、バブル経済で頂点を極め、そしてその崩壊とともに衰退へと向かっていった。だれもが物質的豊かさに取り憑かれていた時代、その流れに背を向けていたフーテンに人々はなぜ魅せられ続



■ どうして初めて住む安曇野の風景を懐かしいと感じるのだろうか?
(写真提供と説明: 筆者)

けたのか。

それを分析するキーワードとして「ふるさと」や「懐かしさ」が登場する。

1931年生まれの子山田監督は満州育ちである。戦後、引き揚げ者として帰還した彼には「ふるさと」がない。デラシネ(根無し草)であり、「アルジェリア生まれのフランス人のような」異邦人でもある。その作品を見た日本人の多くが「懐かしい」という感想をまず口にする、と著者は指摘する。

ふるさとを持たない監督が描くふるさと。それは、具体的な特定の場所を意味するわけではない。もっと抽象的で多義的だ。

だからだろう。作品を観る人は、自問に誘われる。自分はいったい何を懐かしんでいるのだろうか。故郷、それとも実際はどこにもない幻の場所? 「懐かしさ」がこみ上げてくるのは、「喪失感」を抱えているからだ。とすれば、なくしてしまったのは何だったのだろうか。それさえも茫洋としていてわからない。でも考えずにはいられない……。

私たちは、日々の忙しさ、慌ただしさにかまけて、たくさんのことを置きざりにしてしまう。けれども、美しい風景や優れた音楽、文芸、映画作品は、そのことに気づかせてくれる。寅さんが人々を引きつけてきたのも、日ごろの憂さを笑いによって「忘れさせる」からではなく、忘れていたことを「思い出させる」からではないか。

貴重な読書体験を提供してくれたこの本を、著者の友人として翻訳することになった。だが、本文だけで500ページを超える大作。退屈するために移住したのに、その夢の実現はまだ先になりそう。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)

[編集後記]

5月号をお届けします。紙面でも触れましたが、久しぶりに《マニフィカト》に挑戦します。2002年以来だそう。カンタータ、オラトリオ、受難曲、ミサ曲、モテットなどにそれぞれ名曲の数々あり。その上、《マニフィカト》もあって、アマチュアのペースでは一生かかっても演奏しきれません。これを不幸というか幸福というか。(K)